

田村勉

ながい冬ごもりの期間を持つ北国の者には、他の果物にさきがけて、初夏の訪れとともに熟するイチゴは極めて魅力的である。さらにイチゴはビタミンCを多量に含むので、北国の住人にとっては健康の上からも欠くことの出来ない果実と云うことが出来る。イチゴの栽培は需要の増加と優良品種の出現に伴って年々増加し、市場性から見ても本道における果菜の中では安定した種類の一つに数えられている。田舎へ行くと、今でも、特に年輩の方々の中には、イチゴは小供のオヤツか、都会に住む者が食べるものと決めている人が案外多い。田舎に住みながらビタミンCの不足から、高価な薬品の世話になっている人も少なくない。

都会生活者はいわずもがなで、その七〇％位はビタミンCの欠乏症になっていると言つことである。

先に述べたようにイチゴのビタミンC含量は極めて多く、果実の内ではミカン類に次ぐものとされている。成人一人の一日の必要量が五〇(一〇〇mg(労働量によって異なり、重労働の人程要求量は高い))とされ、大粒のイチゴを一日に一五〜一〇個食べるとそれで充分な計算になる。田舎、都

会のいずれを問わず、庭先の一隅に四m²のイチゴを作付して置くと、日当りが良好であれば一年に四〜五kgの収穫をあげることが出来る。食後の果物として舌を楽しませ、かつ健康を増進し明日の活力を生み出すと云う、これほどすばらしいことはないであろう。

イチゴの特性

(1) イチゴは収穫が終わってから秋までの管理が大切

イチゴは多年生の作物で他の果菜類とは異なり、花芽の出来方などを見るとむしろ果樹に近い性質を持っている。即ち花芽の出来る時期は前年の秋で、北大の畑で調査した結果によると、九月の上旬から始まり晩秋低温で生育が停止するまで続けられる。そしてこの花芽が翌春から初夏にかけて開花結実するのであるから、りんごなどと同じように来年の作柄は大体今年中に決定してしまうことになる。それ故に、果実の収穫が終わってから晩秋までの栽培管理が最も大切である。人情の常として春先から収穫までは大切に扱うが、収穫が終わるとヤレヤレという訳で畑をそのままに放置し勝である。これはイチゴの性質をわきま

ぬ誤った考えである。収穫後晩秋までの肥培管理如何によって、翌年の収量品質が決定されるのである。

(2) イチゴは冷涼な気候に適する作物

イチゴは冷涼な気候を好み、高温と乾燥を嫌う。生育の適温は茎葉の発育及び花芽分化期は日中一五〜一八℃、夜間七〜一〇℃がよく、開花から収穫期にかけては二二〜二三℃位の温度が好適である。品種改良が進んでわが国では北は北海道から、南端の九州に至るまで立派なイチゴが生産されている。しかし暖地では夏季の高温、乾燥期には草体が衰弱するので、育苗などには特に注意し、多くの労力と資材をかけて床場に仮植し、日覆を行なって綿密な管理をしている。また最近では、標高が高くなる平均気温が低下するのを利用して、わざわざ高冷地に移して育苗を行なっている。この点東北、北海道などはイチゴ栽培に最も適した天恵の地ということが出来る。低温には強いが、地温が(一〇℃以下では根に障害を生ずる。従って積雪が少なく地面の凍上が激しい寒冷地帯では、晩秋に切ワラ、モミ殻などを株元に敷いて凍害を防ぐようにするのがよい。特に新しく苗を植え付けた場合にはこの注意が大切である。

(3) イチゴと土質

イチゴはあまり土質を選ばないが、有機質の少ないやせた土地では成果を取めることが出来ないから苗の定植前に充分堆肥などを施し、粘質地では石灰を施して土性を改良して置くことが大切である。一般に砂地など乾燥地では早熟になるが、果実の

粒が小さく収量が上らない。反対に湿度が高過ぎると着色不良で熟期が遅れ、病気にかり易くなる。土壌の酸性に対しては適応範囲は広いがPH五、五〜六、〇位の微酸性が適している。

北海道における栽培様式と栽培上の特色

近年は栽培技術が進んで周年栽培が行なわれ、年中都市の青果店の店先で生果が見られるようになって来た。年中出廻るのであるから何時が始まりとは言えなくなったが、栽培の立場から見ると、新しく養成した苗によるイチゴの走りは、十二月から翌年三月にかけて出荷されるものである。これは関東以南の暖地でますます盛んになって来ている。いわゆる石垣などを利用した促成栽培のものがこれである。寒冷地ではこの方法は無理である。次にあげる三つの方法は、北国でも大いに研究して有利な方法を確立しなければならぬ。

(1) 半促成栽培

これはビニール、ポリエチレンの出現によって著しい進歩を示した。各地とも促成イチゴのあとを狙って栽培出荷が行なわれている。北海道では地域によって異なるが三月中、下旬から四月上旬の出荷を目標として五月下旬から六月上旬の出荷を目標としている。この方法で注意を要することは、必ず前年の秋に新植したものにヒルムをかけるべきで、古株に覆いをしても成果が上らず駄目である。

(2) 普通栽培

現在北海道で行なわれている大部分はこ

表1 イチゴの土壌別基準施肥量 (10a当りkg)

土壌の種類	施肥量		
	チッソ	リン	サンカリ
砂	18.2	5.4	16.2
壤	15.2	2.7~13.5	13.5
粘	12.2	2.7~13.5	10.8
植	10.1	1.4~13.5	10.8

品種：幸玉
 収量：1,230kg (収量施肥率は山崎氏による)

して、輸送力、貯蔵力が減じ、また腐敗果が発生し易くなる。次に養分の吸収量を基準にした土壌の種類別の基準施肥量を示す「表一」のようである。

5) 病虫害防除

常に悩まされる二、三のものをのべる。
 ハイロカビ病 (ポトリテイス病)

本道では収穫期の果実に多発生するものである。稀には開花時の花、幼果をも犯す。果実の一部が淡褐色に変色し、後うすねずみ色のカビを密生し果実全体に広がって腐敗する。収穫果に菌がついていると、輸送中、店先で腐敗果を続出し大被害を及ぼすことがある。気温が二〇℃前後で、空気湿度の高い時に急速に蔓延する。

防除法

- 1 多湿状態で発生するから排水に注意しかつ、茎葉の過剰繁茂をさけること。
- 2 多発地帯ではチッソ肥料が過剰にならないよう気をつけること。
- 3 必ず麦ワラ、ビニールなどを用いマルチング (表土被覆) を励行すること。
- 4 被害果を見つけた次第摘取って焼き捨てること。

5 薬剤としてはトリアジン、キャプタン剤の散布がよい。但し一旦発生し始めると徹底的な防除はむずかしいので、環境に注意して発生を抑えることが先ず第一である。トリアジンはトンネル中などでは薬害を生じ易いから濃度に注意すること。またこれらの薬剤は予防薬であるから、毎年発生するところでは発生に先立って散布して置くこと。

メセンチュウ (芽線虫)

イチゴの厄介な害虫で若い新芽の部分に寄生して花芽の分化発達を妨げ、結実不良にする。最初新芽の伸長が衰えて生気がなくなり、若葉が萎縮し、株全体が次第に衰弱して甚しい場合には枯死するに至る。これに犯されると全く花が咲かないか、開花結実しても畸形果が多く、果実の肥大が悪く収量が著しく減退する。

防除法

- 1 苗について伝播するので、苗の購入に当たっては充分注意を要する。
- 2 一旦発生した時には早期に薬剤散布を行なうこと、薬剤としてはホリドールの一〇〇〇倍液、ディプレックス四〇〇〇倍などがよく効く、苗の養成期には特に注意し花芽分化期までに完全に防除して置く必要がある。

アカダニ

他の作物同様最初葉の表面に針の先で突いたような黄白の小斑点が出来、次第に葉全体が黄灰色になって株全体が衰弱する。非常に小さなダニが主として葉裏に寄生するので、発生初期に見落すことが多く思わぬ被害をこうむることがある。乾燥期に

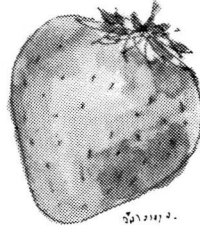
多く発生する。時々畑を見廻って拡大鏡などで点検し、初期に薬剤散布を行なう必要がある。

防除法

有機燐剤 (フェニカプトン・マラソン・ホリドール・バイジットなど) を葉裏から徹底的に散布すること。発生が多い場合は、一週間おき位に二、三回用いること。また最近リンゴのダニの場合同様、燐剤を連用するとダニに抵抗力が出来て効力が減退している地域があると聞いている。このような場合にはアカール、サピランのような有機塩素剤を適宜折込むようにしなければならぬ。

(北大農学部園芸第一教室助教)

苺の立体栽培



苺の栽培は経済的にも非常に有利なもので都市近郊の農家は結構小面積で而も短期間に大きな収益をあげている。また傾斜地などで、他の作物を作るには表土が流亡する恐れがあったり、作業が煩わしい場合などでも一旦苺を植付ければ、三四年は楽な管理ができる。そして少し面積がまとまれば、都市の団体客を貸切りバスで招致し、苺狩りをさせて、レクリエーションを楽しんでもらい併せて、収穫の手間を省き居ながらにして現金収入を狙い小玉の苺はジャ

ム用にして又利用するといった多角的な経営をするのも、好ましいものである。唯一番警戒すべきはメセンチュウの害であらう。かつての主産地が姿を消しているのは皆線虫が原因である。

筆者は住宅の前庭を使って苺の立体栽培をうまくやっていると自讃している一人である。これは別に教えられたものでないから、或いは苺栽培の専門家から見れば、邪道かも知れないが、僅かな土地面積を有効に利用し、家族の者特に子供達に喜ばれているのだから、自慢しても罪はないと思っている。その方法は、四すみにブドウを植え (これはカメルスとナイヤガラ) 柵を立てとし、その下にイチゴ (幸玉) を定植したのである。この立体栽培の理由は、ブドウの葉の茂るのは比較的遅く六月末でありその頃には苺は実る。リンゴ、ナシの下では薬剤散布が頻繁で苺には不向きな様な気がする。こんな事で始めたが、収穫後のイチゴも天井をブドウの葉に被はれるとはいえ僅か四株であるから外周からも日光通気があり、どうやら人並みの収穫が得られた。ただ雑草ことにハコベには参った。とつてもとつても出てくるのでネをあげてしまったが、翌年からはシマジン散布したところ、雑草が一本もなくなくなってしまったのは驚いた。除草剤さえうまく使えば、雑草の取りにくい苺作りはいとも簡単であると自信を持てる様になった。然し五年目になると流石粒は小さく稔りも僅かになってしまったので、今秋はチヌーリップにでも切りかえ、二三年休閑したいと思つてい

(十楽多)